

『おとこ』・『おんな』

塩谷 饒

I

創世記における『ひと』の助け手として『おんな』が造られた記事〔2／18-24〕は、聖書の男女観を分析的・論証的な手法によらず、素朴な物語の形で伝えている点で、多くの人の関心を呼び、また種々の省察を促してきたが、言語の研究者にも見逃せない考察の資料を含んでいる。まず現行の口語訳によって該当箇所を引用したうえ、邦訳の吟味に関してなお必要があれば、文語訳や新共同訳など他の版を参照することにしよう。

また主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべての生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とにをついたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。

「これこそ、ついにわたしの骨の骨、

わたしの肉の肉。

これを女と名づけよう。」

それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。

人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

人が「名をつける・名づける・名を与える」は完全に同義の命名行為であって、この記事には古代人の言語観の一つが示されている。すなわち、古代ヘブル人にとって、名は偶然とは思えず、「もの」と「ともに」存在した。事

物は人が名をつけたとおりに呼ばれており、これが神の定め給うところと考えた。たとえば人が羊を見て「ヒツジ」と呼んだとする。その結果、今後羊は-神の意志によって-「ヒツジ」と呼ばれることになった。これはきわめてナイーヴな考え方であって、最初の人がヘブル語を話したことが当然の前提になっている。そのうえ神の語りかけもヘブル語によることに何らの疑義がなく、かえって近世の初めに至るまで「ヘブル語は聖書の言葉だから神聖な言語だ」という見解を抱かせた原因にもなったのである。それはともかく、人の最初の語（=発話行為）が命名にあるというのは充分な洞察であって、名をつけることは、事物を区別し、整理することであるから、人の理性の活動の基本的形態と言えるであろう。そしてこれを發揮する能力の根拠は、創世記によれば、ここに引用した箇所のやや前に記された「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた」に求められる。そしてこの創造物語りとは別個の資料による第1章の句「神は自分のかたちに人を創造された」も、創世記編集者にとって同等の重みをもつことは確かである。

ところでここに記したことは、すでに発表されてきた考え方の要約に過ぎず、とくに新しい意見を示すものではない。拙稿本来の目的は、神から『ふさわしい助け手』を与えた人が「男から取ったものだから、これを女と名づけよう。」とその命名の理由を述べている点に端を発して、『おとこ』・『おんな』に関する語の表現を調査・考察することにある。

さて、この口語訳と文語訳の表現「…男より取たる者なれば之を女と名づくべし」は『ひと』（アダム）の意図をそのまま伝えているが、命名の理由付けの分脈はそのままでは不明の感を免れない。すなわち日本語の『おとこ』と『おんな』¹⁾という語の間には、英語に見られるman～womanのように共通の語根が認められず、また語例は別になるが、ドイツ語のStudent～Studentin（学生～女子学生）に見られるような一方を基語とする女性名詞化派生辞も抽出されないからである。その点では新共同訳では原語を転写して付記し、理解度を高めようと図った跡がうかがわれる。

これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう
まさ男（イシュ）から取られたものだから。

つまり、一般読者も()内に示された原音のカナ表記から、ヘブル語 is

『おとこ』・『おんな』

『おとこ』～*îssâ*『おんな』の関係が容易に感じ取れることになった。

実は現在の創世記研究によれば、二つの語の間には語源的な関係がないことが確かめられている。そこで、上記箇所における『女の命名』の由来は、いわゆる語呂合わせに基づく民間語源のたぐいに属し、言語学上根拠のある説明ではない。しかし、実証的な言語研究がようやく18世紀後半になってから本格的に始まったことを顧みれば、発音の共通部分によって両語に本質的な関連をとらえたことは、当時のヘブル人には充分納得の行く説明であったと考えられる。それは、このような語呂合わせに基づく民間語源的な由来の解説が、創世記にしばしば見られるところから明らかである。²⁾

さて、この箇所を自分の言語に翻訳する際にとった訳者の態度や工夫は実際にさまざまあって、それはもっぱら当該言語の基礎語彙の意義素と語構成手段のかかわりに大きく拘束されている。

この点では、日本語の『おとこ』・『おんな』は人間の性別を表す代表的な独立語であるから、両語に共通の意義素が抽出されないとはいえ、問題の『ひと』の発話を翻訳する場合に、そのまま使うのに抵抗は感じないのも事実である。そして、ヘブル語ではこの箇所がもともとリズムの整った詩形で表されていることを顧みるなら、／otoko／～／oNna／は頭韻のように同じ母音／o／で始まり、単語を構成するモーラの数も3で共通であるから、日本語訳にそれとなく韻律感を与えていたと言えるであろう。

さらに、かならずしも科学的な説明が簡単に求められるわけではないが、多くの日本人の語感によれば閉鎖音t, kなどはきつく、一方鼻音m, nなどはやわらかく響く音と受けとめられるところからすれば、両語をならべた場合、前者には何となく男性的な、そして後者には女性的なムードを直感するのが自然はあるまいか³⁾。こういう面を考慮に入れるに、新共同訳で付記されたイシュヘイシャーはむしろ本文から外して注記にとどめた方が適切であったように思われる。なぜなら、聖書は默読されるばかりでなく、しばしば音読によって親しむべき書物に数えられるので、そのままカナ書き部分を声に出して読み下すとリズムが乱されることになるからである。

II

旧約聖書のインド・ヨーロッパ語族への本格的な翻訳はギリシア語七十人訳(Septuaginta)をもって始まつたのであるが、上記箇所における『おと

こ』と『おんな』に対しては、コイネーギリシア語で普通に用いらる *ἀνήρ*、*ἄνδρος* と *γυνή* を当てており、語源的に関連のある語や音声の共通部分によって由来を説明し暗示していない。この点でも、ヘブル語に欠けている動詞の時制を導入している点や分詞の複雑な用法を示していることなどを別として、一般的に逐語訳的なテキストの性格が現れている。

これに対してカトリック教会において権威を持つラテン語訳聖書Vulgataでは、vir『男』の対語として、より一般的なmulierやfemina『女、妻』を避けて、virの派生語viragoによって女が男に由来するという趣旨を視覚的・聴覚的に伝達する効果を図っている。もっともこの語は、明らかに男性名詞に基づく女性名詞なので、他の文献では『男らしい女、女傑…』の方向に傾斜して使用される場合の例が圧倒的に多い。なおVulgata自体において『ひと』の命名箇所以外では『おんな』を表す語として上記mulierが普使われ、場合によってはfeminaが当てられているのである。

周知のごとく、近代諸語の中では英語とドイツ語の聖書翻訳の数は多く、いずれも他の言語による刊行種数をはるかにしのいでいる。

英語の聖書においては問題の『ひと』の命名行為の箇所で、男女を表すもとも基本的な対語man～womanが一様に使用されている。wo- はドイツ語の -in のように女性を示す名詞の造語に与かる生産的な派生辞ではなく、古英語wif（原義=wife）の変化した形であることを学んでいなくても、manを通じて語源の関連性が容易に察知できるので、訳者たちはとくに労することなく原文のニュアンスを伝えることに成功した例のひとつである。『ひと』の生物〔学〕的弁別によって男女を表した創世記1章と、それを引用した共観福音書でmaleに対するfemaleを当てているほかは、すべてwomanが『おんな』を示している。この傾向は1611年刊行の欽定訳から1989年の新改標準訳（NRSV）に至るまで変わらない。

この点では邦訳の方がそれほど統一的でなく、例えば文語訳において別々文字で婦（をんな）と記している場合もあり（創3ノ1）、口語訳で現代語風な『あの婦人』という表現が行われている箇所もある。（マルコ12ノ44）

ドイツ語訳では、上記女の命名に関してMannに対する女性名詞形Männinを当てる例が多い。近代ドイツ文章語が成立してゆく過程で推進の一役割を担ったルター訳（最終校訂1545年）では、当時の綴りの習慣に従ってなおMenninという形を取っているが、後続／i／音種によって語幹の/a/が

『おとこ』・『おんな』

／e／に転化するのは古高ドイツ語以来の音韻傾向だったので他の語例も数多く、ここにMannとの関連を認めるることは当時の読者には何ら問題が感じられなかつたと察せられる。

もっとも16世紀のドイツ語においては、男：Mannに対しては女：Weib（綴りはweybとなることもある）が一般に使われていたのでルターもそれに則って聖書のきわめて少数の場所を除いて、『おんな』にはもっぱらWeibを用いている。

それならMennin (=Männin) は、ルターがドイツ語の生産的な派生辞に着目してMannの対語を巧みに造語したものであつて、それが後世の訳に影響を与えたと言えるであろうか。事実はそれと異なり、この語はすでに古高ドイツ語（およそ750～1050年）の諸方言に現れ、また中高ドイツ語（1050～1350年）では格調高い詩で男に対する女の名称として使用されたことが、グリムなどの歴史的辞典で確認される。それのみならず、15世紀の中期にゲーテンベルクが活版による印刷術を発明して以来ルターの訳業がなる前に刊行されたドイツ語聖書の中にもmenninを用いて『おとこ』から『おんな』の由来を暗示している例が存在するのである。

ルター訳は時を経るにつれ、一般読者にとって次第に理解しがたい語法が生じてきたことから、それを除いて時代の言語に適応させる改定が度々行われて今日に及んでいるが、『おんな』の命名については綴りが現代風にMänninとなっただけで基本的には変っていない。この形は現在ふつうに『おんな』という意味で用いられることはなく、雅語や冗句などで『男まさりな女、男のような女』を指す程度である。それにもかかわらず、とくにルターに頼らず独自の翻訳態度を示すドイツ語聖書においても、20世紀前半まではMänninを示すものがある。（Zürcherbibelの現代語訳、Menge, Schlachterなど他に多数）それは、たとえ全くの日常語に數えられなくても、語構成の各部はきわめて普通な既存の語をためらわずに選んで、命名の由来をたやすく理解させることに役立てたルターの卓見に同調したものと考えられるであろう。

ただし、Herder文庫版（1965）、日本語の新共同訳に相当する統一訳（1980）、今日のドイツ語による福音（Die gute Nachricht in heutigem Deutsch 1982）といった新しい訳ではMänninを採用せず、各々独自の表現を行っている。まずHerder文庫版では、現在それ自体日常語の使用から外

れて古風に感じられるWeibをもって『おんな』に当てているのに対し、統一訳においては、当代普通の基礎語彙に属するFrauを一貫して示している。ただ後者では例のヘブル語 *is* ~ *íssat*による命名の由来を注に記して、読者の理解に役立てている。なお統一訳はドイツ、オーストリア、スイス、ルクセンブルクなどドイツ語を公用語（またはその一つ）とする国々ばかりでなく、ベルギーやイタリアなどドイツ系少数住民を含む地域の聖職者・学者の主導・協力により、ローマカトリックと新教諸派の広範囲にわたる信徒に向けて刊行したものである。従って、平均的な現代文章語で記されており、女〔性〕に関してはもっとも代表的なFrauを用いている。創世記1章の生物創造の場合もとくに区別することはない。

今日のドイツ語による福音でも同じ傾向が窺えるが、全体として原文に拘泥しない自由な翻訳と言える。『おんな』の命名の記事に関しても、『ひと』は自ら『おんな』と呼ばず、全く散文的な発言に終わっている。

Endlich jemand wie ich! Sie gehört zu mir, weil von mir genommen ist.

これは日本語では「ついに私にふさわしいものだ！私から取られたのだから私のものなのだ。」という意味内容に相当する表現である。

ちなみに、現在のドイツ語において一般的に女を表すFrauは、もともと身分が高い既婚女性に関して用いられた語であったが、次第に意味の下降的な拡張が生じて從来使われていたWeibにとって替わり、この語が持っていた『妻』の意味も受け継ぐに至った。現在の日常語では未婚の成人女性への呼び掛けにも使われている。一方、Weibは俗語で軽蔑的な意味に限定して使われる程度である。実は改定ルター訳聖書でも20世紀後半（新訳：1956年約1962）からFrauを導入している。

ところで、目下ドイツ語圏内の福音主義教会ではルター聖書の改訂版が圧倒的に多く使用されている。それは確かに綴字・語法・語彙にわたる原文とのズレを除去して代替するとともに、今日の文献批評の立場から明らかに受け入れられない解釈には訂正を施している。しかし上記Manninによる命名の由来の保存をほんの一例として、ルターの言語の文体の特徴はおおかた認められると言えるであろう。それは日常口語のレヴェルに立ったものではないが、聖書にはそれなりの文章語としてのスタイルがあって然るべきだという考え方-韻律感を始めとする文学的な香りや、時に臨んでの莊重な表現な

『おとこ』・『おんな』

ど根強く、このような改訂版も現代語の〔特殊な用途に応じたレヴェルの〕文体とみなされているわけである。すなわち、ドイツ現代語辞典として高く評価されているWahrig (1974) やDuden-D・U・W (1989) などで、例のMänninの語義を説明するに際して『男らしい女』とともに『聖書の用法で女』と記載しているのもその証左に数えられる。

さて、言語の分類上英語・ドイツ語とともにいわゆる西ゲルマン語に属し、また両者の中間に立つ特徴を示すオランダ語への聖書翻訳は、中世末期から部分的に行われているが、完訳として後世の文章語の発展にきわめて大きな影響を与えたものは、1618-19年に刊行された欽定訳Staatenbijbelである。この版では『おとこ』には一貫してmanが当てられており、『おんな』は命名の箇所の他はみなvrouw (=独.Frau) となっている。しかし、例の『おとこ』の発言の場合はmanninne (=独.Männin) をもって語源的な関連を暗示する点で、ドイツ語諸訳に通じている。実は、このStaatenbijbelはルター訳の表現を参照しているところが多い一方、語法上の古さに関しては英語欽定訳と現代語との差に比せられる。ところが、オランダおよびベルギー両国の聖書協会から発行された新しい語法の版(1985年)でも、この箇所の『おんな』だけはわざわざ括弧付きで“mannin”と表しているのは注目すべきである。そして何種類かの現代オランダ語辞典がmanninを見出し語として記載し、『おんな』の聖書的な表現と説明している。

なお西ゲルマン語の中での独立言語でありながら、さらに古英語など共通した言語的特徴を示す点で、ともに北海ゲルマン語のひとつに数えられるフリジア語では、13世紀以来まとまった文献が現れているが、聖書の完訳がオランダ聖書協会から出版されたのが、ようやく1943年のことであった。この聖書での男女の性別はman～frouで表されているが、命名の記事に限って『おんな』をmannineとし、ドイツ語やオランダ語諸訳に倣って男女の語源的な関連性を示している。それが可能なのは、オランダ語やフリジア語においても一ドイツ語ほど生産的ではないにせよ一派生辞-in(e)を利用して女性名詞が作られる場合があることによる。

こういう工夫、すなわち現代語としては一般に用いられない単語を特別に利用して、原文のニュアンスを伝えようとする努力は、北ゲルマン語に属する言語圏内のスウェーデン・ノルウェー・デンマークなどルター派の影響が強かった国々における聖書翻訳にも認められるのである。

これに対して、ラテン語を祖語とする近代ロマンス諸語での翻訳聖書においても、『おんな』の命名に関して対応の仕方に違いがある。例えばフランス語では、まったく日常的な語彙によりhommeが『ひと』・『おとこ』を、またfemmeが『おんな』を、一貫して表しているが、命名の箇所に関しては（1954年のL. Segond訳のように）欄外の注で *i*ss～*i*ss*a*による由来の説明に言及しているものもある。他方スペイン語では、男女は一般に日常での対語hombre～mujerが通して使用されている。ただし、例の命名は“varón”から取られたから“varona”という工夫によって伝達を図るものもある。（英國・米国・スペイン・アルジェンティン聖書協会の共同発行版 1947年）また『ひと』とその『助け手』としての男女は、創世記編集当時の社会的通念である夫〔おっと〕妻〔つま〕に該当するわけであったので、命名に続く記事にその表記が見られる。もちろん聖書全体を通じて散見することを付言しておく。

語源的観点から言えば、『おっと』はもともとヲヒトの音便形で『男の人』に由来するものであり、また『つま』は周知のごとく上代日本語では配偶者の一方を指して呼ぶ語で女性に限られることはなかった。しかしあわが国において聖書の翻訳が試みられるはるか以前に今日の慣用が成立したので、どの版を見ても同じように夫と妻が使れている。なおまとめた単位としては夫婦も用いられるが、こういう表現は日本語聖書には出てこない。

さて、ギリシア語では-七十人訳および新訳原典-男と夫・女と妻を語彙として区別することなく一様に *ἀνὴρ*, *ἀνδρός*・*τιμη*を使用しているから、それらがいったい何を指しているのかは文脈から察するのみである。

他方、同じく西洋古典語の一つであるラテン語訳（Vulgata）においては、夫の場合はふつう男を表すvirが当てられるのに対し、妻には女として一般的な語ともいるべきmulierでなく、独自の表現uxorがある。

ラテン語を祖語とする近代ロマンス諸語のうち、フランス語・スペイン語・ポルトガル語では基礎語彙としてはとくに妻と女を区別しなくても用がたりており、反面『おotto』に対しては常に決まった単語を備えている。これは後に触れるように、男と人が同形であるので、夫には独立の表し方が望ましいという意識が働いた結果であろうか。ちなみに通常女と妻とを分かつイタリア語の場合もあわせて例示してみよう。

『おとこ』・『おんな』

	仏語	西語	ポルトガル語	イタリア語
夫	mari	marido	marido	marito
男=人	homme	hombre	hiemem	uomo
女;妻	femme	mujer	mulher	donna;moglie
実は仏・西の諸語にポルトガル語を加えたロマンス語では、夫婦の対において同根の語が存在している-仏 époux-épouse 西 esposo-esposa ポ esposo-esposa-が聖書では通例その意味では現れない。				

英語では欽定訳から現代語諸訳に至るまで、日本語の夫・妻と同じ意味を持つhusband・wifeが一貫して使われている。

ところがドイツ語ではルター時代から現代語まで、男と夫・女と妻はふつう区別した単語を用いて来なかった。従って表記の差異はともかくとして、現代の綴りによるMann-Weib, Frauにまとめられる。

ドイツ語に近い関係があるオランダ語ならびにフリジア語でも同じ傾向にあり、男と女および夫と妻は同一の語で表される。ただし、これらの聖書ではドイツ語のWeibに当たる語は現れず、Frau系統のものに絞られる。

	英語	独語	蘭語	フリジア語
男	man	Mann	mann	man
夫	husband	Mann	mann	man
女	woman	Weib/Frau	vrouw	frou
妻	wife	Weib/Frau	vrouw	frou

ところで数ある独訳聖書の中には-中世後期から近世初期の写本または印刷版において-『つま』に対して『主婦』を意味する合成語HausweibもしくはHausfrauと表現すること例が散見する。ただし正書法の整っていない時代の文献で綴りが多様であるため、一々の列挙は煩雑なきらいがあるので、ここでは現代風の綴りに統一して傾向を察知するにとどめた。

なお古高地ドイツ語のTatianと呼ばれる翻訳聖書においては『妻』にkenaを『夫』にgommonを当てている例があるが、前者のように他のゲルマン語圏内に（北欧諸語）同根の語がいま基礎語彙に見られるものもある。

III

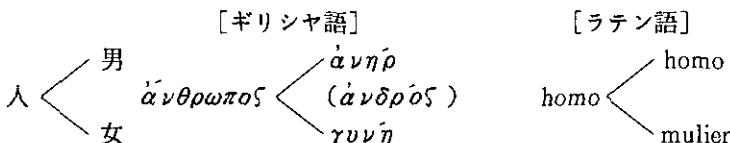
先の項目では、創世記の創造物語りに端を発する男と女の言い表しかたを翻訳諸聖書で考察したが、次ぎに両者の上位概念とも言うべき『ひと』を含

めて点検してみよう。

ここで特筆すべきことがある。ギリシア語七十人訳、ラテン語Vulgataおよび英語の欽定訳においては、『ひと』の命名から楽園喪失を経て長子カインの誕生に至る一連の記事で「人」という語がことごとく（13回）Adamをもって当てられているが、これは原語の影響によるものであって、日本語の文語訳で『アダム』と表わされているのも同じである。だが、その他の箇所ではAdam～アダムがそのままストレートに『ひと』を表す場合はない。

さて日本語諸訳（上記部分を除く文語訳と、口語訳および新共同訳）では2度の創造物語りにおいて『ひと』『おとこ』『おんな』が一貫して用いられ、聖書の他の箇所に通じる基調もこれである。ただし、新約聖書において少数の例外がないわけではない。すなわち、イエスの発言の中で『おんな』を『婦人』と呼んでいるところもある。（マルコ12,44：原文では人称代名詞。さらに新共同。ヨハネ8,10：原語はτέλειοςであり、他の場合には『おんな』が当てられている。）また『ひと』に関しても、パウロの弁証的な発言や（使徒行17,29／ロマ1,18；3,5）ヘブル書での引用（1,6）では『人間』と表しているが、これは論議を主とする趣旨の文体の中では現代日本人読者の感覚にマッチした訳語であるとも言える。

次ぎにギリシア語（七十人訳と新約聖書原文）とラテン語Vulgataでは、上に触れた命名の箇所と、祭司典資料に基づく創世記1章の生物……世からの男女の区別を除けば、旧新訳を通じて以下のような構図が認められる。



ギリシア語の $\dot{\alpha}\nu\eta\rho$ ($\dot{\alpha}\nu\delta\rho\circ\varsigma$) は『ひと』の意味で使われる場合もあり、聖書にもかなりの例が認められるが、 $\alpha\nu\theta\rho\omega\pi\circ\varsigma$ に比べれば五分の一程度である。

ラテン語においては、基礎語彙の範囲内で『ひと』が『おとこ』によって代表される点で英語に共通するものがある。もっとも英語では冠詞の有無が語義を分かつ標識になっており、それは聖書においても変わらない。

つまり：man=ひと/a~the man=おとこ/woman=おんな

『おとこ』・『おんな』

であって、human being (creature) のような抽象度の高い上位概念を聖書の翻訳本文に持ち込むことは、一般に避ける傾向にあるのである。

これに対してドイツ語では、『ひと』を表す単語としてMenschをもっとも普通な語彙の中に数えている。語源学の観点から言えば、Menschは古代ゲルマン語ではMann [この語も元来の男の意味に兼ねて人をも表した。]に基づく派生形容詞を名詞化したものであったが、すでに古高ドイツ語時代から現在の用法を示していたから、『ひと』は翻訳聖書の始めから今に至るまで、もっぱらMenschに限られることになったのは当然である。

オランダ語においても、『ひと』はやはりドイツ語と同じ語源に連なる独自の基礎単語を持ち、古い綴りではmenschまた現代の表記でmenであるが、フリジア語の『ひと』minskeも同種のパターンである。

なおロマンス諸語では祖語のラテン語や英語の型に従い、一般に『ひと』と『おとこ』の別がないが、ともに冠詞を付して使用されるのが特色になっている。とりわけ「人」の場合に定冠詞をとるのが、英語と対称的である。すなわち、l'homme [フランス語] el hombre [スペイン語] l'uomo [イタリア語]など

さて以上の記述のように、近代文明社会制度の発展に先んじて貢献した英仏国民の母語において、少なくとも現代の基礎語彙の形では『ひと』と『おとこ』の違いがないのは、元来は『おとこ』が『ひと』を代表していたことに由来するのである。この点では社会構成員の意識がややおくれて形成されたと言われるドイツ語圏国民が、その原語の初期の段階から男女の上位概念としての『ひと』を表す基礎単語を使用していたとの対称的である。否、それどころでなく、欧米諸国に比しはるかに封建制度の維持が続いた日本の言葉に、古くから男女を包含した『ひと』が用いられてきたし、さらに近代文明摂取のうえではわが国に遅れをとってきた中国の言語では、日本語で文字が使用されるはるか以前から「人」と言う表意文字によって性別を超える語を明白に所有していたわけである。しかも、日本語では「明仁一あきひと」「正人一まさ（ひ）と」のような固有名詞の表し方の中に、古くは『ひと』も『おとこ』が代表し得た痕跡を認めることができよう。このような事実を顧みると、ある言語はほかのものより「進歩的」・「後進性が目立つ」という批評が主観的な判断にとどまることが多く、また言語の現実の存在形式=Existenzformは、もっぱら封建主義・資本主義・社会主義などの制度によっ

て規定されるといった主張が短絡的に過ぎる⁶⁾ことが確かめられると言えるであろう。

注

- 1) もっとも文語訳では、旧カナづかいの表記に従って『をとこ』・『をんな』となっており、後者はさらに『婦』という文字で表されることがあり、創世記3章においては8回いずれもこれが使用されている。
- 2) すなわち創世記26の15—25において、イサクが三つの井戸に名を付けたこと、また同書30章でヤコブの妻レアとラケルが各々の子供たちに命名したことの記事などが、その好例である。新共同訳では由来の説明に原語のカナ表記を付しているので、その事情は一段と理解しやすい。
- 3) 言語の音声がどんな感じを与えるのかについて一般的な法則は認められない。とは言うもののまったく個人的なものでもなく、一つの言語団体に属するものは共通した感じを受けるようである。例えば、ルター訳ドイツ語聖書において、イエスの生誕の箇所（ルカ2章）で母音iが連続して使用されていることが聖家族のat homeな雰囲気をよく伝え、また最後の晚餐のくだりで（マルコ14章）イエスの行動を母音aの重ねが莊重な気分を表現していると言われるが、そうはっきり感じるのはドイツ語を母語とする人たちに限られるのではないか。

• und wickelte ihn in Windeln und legte ihn in Krippe. [初子を] 布にくるんで、飼い葉おけの中に寝かせた。

Und er nahm den Kelch, dankte und gab ihnen den; und sie tranken alle daraus.

また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。

- 4) その中でとくに注目すべき文献として挙げられるのは、音韻論的にa～e (ä) の変移が生起しない低地ドイツ語翻訳聖書である。つまり、両Kölnner Bibeln (1478) Lübeckerbibel (1494) Halberstadterbibel (1522)など一いずれもルターの旧約聖書刊行に先立つ版においても人に名付けられた女がmanninneもしくはmannynneという形を示している。これは幹母音への影響にかかわらず、inをもって代表される女性名詞化派生辞が現在の低地・高地ドイツ語の全域に亘って生産的な機能を持ってい [たのである] ることを告げている。

『おとこ』・『おんな』

- 5) すべての「人」が対象でなく、付加語的な説明を伴う特定の「人」を指している場合には、該当者が理論的に女性でありえても、男性が代表するのが普通である。例えば詩篇 1－1 の「人」は七十人訳で *ἀνθρώπος* Vulgataで *vir*をもって当てられ、英訳はたいてい *the man* である。独訳では *Mann* が使われているほか、指示代名詞の男性形を示すものもある。(ルター、メンゲなど) 日本文語訳では「・・・者(もの)」で表しているが、これは男女の別を意識しないで人格が表せる便利な日常的語彙である。
- 6) 前者は、構造主義前の言語学研究をリードした学者 Otto Jespersen などが英語の優れた点を列挙した姿勢に明白であり、また後者は、旧東ドイツの語史研究者たちが「マルクス・レーニンの根本的な思惟こそ言語研究の科学性を決定づける」と公言してきた態度に認められる。